

円戒と三乗権実論争

進藤浩司

(名古屋大学)

一 はじめに

伝教大師最澄（七六六／七六七～八二二）は大乗戒壇の独立を主張し、南都僧綱との間に激しい論争を行った。『山家学生式』を三度にわたって、朝廷に提出し、大乗戒壇の独立を主張する最澄に対して、僧綱は猛烈に反対した。その南都側からの批判に対して、最澄は『顕戒論』においてさらに反論を試みる。一方、最澄は南都との論争とは別に、奥州の徳一（生没年不詳）とも『法華経』と三乗一乗の権実問題について、数度にわたる論争を行っている。これは『守護国界章』等にまとめられる。

これらの論争は、ほぼ同時期に平行して行われたものであり、両方の論争は、敵手を異とするけれども、内容的に無関係というわけではないと思われる。この点について、日本仏教戒律研究において大きな業績を残された石田瑞麿氏は、当時の天台宗の状況から見ても、最澄は南都にも徳一にも負けることができないものであり、両方の論争が関係していたと見るのが妥当であろうと指摘されている^{（1）}。しかし、両論争は同時に論じられることが多いが、思想内容の関係性やつながりについては、現在までもそれほど明らかにされてはいないようである。小論では、徳一との論争

によって得られた成果が、大乘戒壇独立の主張にどのように関連したか、この点について、とくに最澄の『法華經』に対する主張に注目して考察してみたい。

二 大乘戒壇の独立と三一権実論争

大乘戒壇の独立は、最澄以降の日本仏教の方向を示したユニークな主張ではあるが、円戒⁽²⁾そのものは、最澄が全く新しく創出したというものではない。最澄の円戒の思想的根拠・影響関係については、次のようなものが考えられている。智顗、湛然、明曠といった中国天台の系譜からの影響、また南都における道璿律師の『南唐の註經』、法進の影響などが考えられている。天台宗の系譜では、理戒としての円戒を主張する傾向の強い智顗に対して、梵網戒を円教菩薩の戒として重視する湛然、明曠の影響が強いと言われる。とくに明曠については、最澄の円の三聚思想の源流とも言われており、直接的な思想関係を多く持つと思われる。⁽³⁾しかし、最澄の思想は、長年の論争によって、天台の系譜や最澄以前の南都仏教からの影響関係だけでは収まらない独自の部分も出てきたと思われる。⁽⁴⁾

大乘戒壇の独立については、法相宗による相奪という実際的な問題があることは否めないが、徳一を中心とする論敵とのやりとりによって、思想的要請として、もたらされた部分も大きいと考える。

円戒は、三一権実論争まで含めた場合、論争の中にどのように位置づけられるのであろうか。徳一との論争は、弘仁十二年（八二一）の『法華秀句』の完成で一応の終わりを見る。一方、『顕戒論』はその前年に朝廷に提出されている。また、三一権実論争の中心的史料である『守護国界章』は、弘仁九年に成立している。最澄と徳一との論争は、確実に確認できるところでは、弘仁八年の『照権実鏡』が著されたあたりから始まるが、その翌年に小乗戒棄捨を行

っている。『照權実鏡』に始まった論争は、幾度かの反論・再反論を経て、その論争の成果は『守護国界章』として結実し、さらに『法華秀句』において一応の決着を見る。『顯戒論』で主張されている円戒は、ほぼ平行して行われた徳一との論争からも、思想的な成果を得ているものと思われる。

三 円戒と即身成仏思想

最澄と徳一との論争は、一乗思想の権実の他、『法華経』の解釈と権実、天台教学と法相教学についての論争、仏性論争など多岐にわたるため複雑な面もあり、一義的に整理をすることは簡単ではない。しかし、三一権実論争を大乘戒壇独立の論争につながつていく一連の論争という視点で捉え、最澄の主張を考察の便宜上次のように整理する(5)としたい。

- ・『法華経』の権実について。
- ・機根(時機)の重視(円機等)。
- ・即身成仏への方向性。

一般に三一権実論争と言われる成仏の可能性についての議論の根拠となっているのは、『法華経』の権実であり、所化の衆生および機根も、そこから発した問題であるので、別の問題ではない。

徳一との論争が始まる少し前と思われるが、弘仁七年(八一六)、最澄は『依憑天台集』の序を著している。これには、「円機(已熟)」という言葉が出てくることで有名である。最澄は、「我日本天下、圓機已熟、圓教遂興。此間後生、各執自宗、偏破妙法。」(『伝教大師全集』(以下、『伝全』)卷三・三四三頁)と言い、円機と円教を対応させ、円

教である天台宗が興ったとしている。最澄には論争以前から、機と教とを、現実の時代に対応させる思想があったことが分かる。⁽⁶⁾これは『法華秀句』に至るまで、最澄に一貫した思想的特徴である。このことを念頭に置いて、晩年にかけて提唱された即身成仏思想を軸に検討することで、最澄と徳一との議論が『顕戒論』にいかにつながっているのか、その一端を窺うことができる。

最澄は『守護国界章』において直道、『決権実論』において大直道、さらに『法華秀句』においては、最澄の思想の到達点の一つであると思われる即身成仏思想を打ち出す。さらに、一乗真実と三乗方便についての議論を戦わせる過程において、機根、時機についての議論へと論が広がっている。これは、徳一との論争である三一権実論争で深められた議論であるが、その成果は円戒の上にも現れている。⁽⁷⁾

『顕戒論』「開示頓悟漸悟兩種菩薩迴直之行明拋四十三」において、最澄は僧綱から次のように論難される。

僧統奏曰、而但去不交小律儀、法華經云、「汝等所行、是菩薩道。」最勝王經云、「欲求阿耨菩提、當行聲聞獨覺之道。」即知、小律儀外、更無大律儀、但所護持、有麤有細。已上奏文。 （『顕戒論』、『伝全』巻一・一四九頁）

『法華經』の「藥草喻品」の文を引く。「今爲汝等、說最實事、諸聲聞衆、皆非減度。汝等所行、是菩薩道、漸漸修學、悉當成佛。」（大正大藏經 巻九・二〇頁中段）とあるのを引き、「漸漸に修行する」（つまり頓悟ではない）と言っているのである。

これに対して、最澄は、次のように反論する。

論曰、汝等所行是菩薩道者、當知、不是直往菩薩之行、是則回小入大菩薩之行也。夫學神通乘者、何用羊象乘。明知、今所引經文、開漸悟行。又最勝王經、當學二乘道者、是亦漸悟菩薩之行、不宜頓悟菩薩之行。即知、小律

儀外、更有大律儀、強關大道、示其小徑。十魔之中、豈不其一哉。博覽賢哲、幸照回直歟。

（『伝全』卷一・一四九頁）

南都側の指摘した「菩薩」というのは、直往菩薩ではなくて、回小入大菩薩であり、『法華經』の文句は、その行のことを言っていると答える。最澄は、『法華經』に関わる二種の菩薩の概念、「直往菩薩」と「回小入大菩薩」を出して、直往菩薩と頓悟菩薩の行と結び、他方、回小入大菩薩を漸悟菩薩の行と結んでいる。僧綱から『法華經』を根拠に批判された最澄が、同じく『法華經』の解釈から反論したものには違いないが、最澄はここで突然にこのような頓漸と菩薩の概念を出したわけではない。

これには、二つの根拠があると思われる。一つは、中国天台宗の明曠の思想的影響であり、もう一つは、頓漸と『法華經』への関わり方についての徳一との論争（『守護国界章』）を受けているということである。一つ目の明曠からの影響としては、明曠は別教菩薩は漸具、円教菩薩は頓具とし、それが最澄の戒律についての頓漸菩薩の思想に多くの示唆を与えたと思われる。⁽⁹⁾ もう一つの徳一との論争の成果というのは、『顕戒論』のこの叙述の伏線となる議論で、『守護国界章』に展開されている。

麤食者曰、彼云、「聲聞藏即三藏教也。菩薩藏即通別圓教也。爲決定聲聞說教名三藏教。爲退大聲聞說教名通教爲漸悟菩薩說教名別教。爲頓悟菩薩說教名圓教。」今謂不爾。若爲退大聲聞說教名通教、亦爲漸悟菩薩。說教名別教者、法華應名通教亦名漸教。何以故。退大聲聞、即名漸悟菩薩故。若許爾者、法華不應妙教攝、以爲退菩提心之舍利弗等說教故。當知、法華是漸教、非攝圓頓。何以知者、攝論云、爲引接一類不定種性聲聞、諸佛說一乘。由此故知、法華是漸教、非圓頓教。法華會中、授佛記別舍利弗等八千聲聞、是退菩提心類、是名一類不定種性聲

聞、此回心向大以後、復轉名漸悟菩薩、非別異類。

（『守護国界章』、『伝全』卷二・二八九～二九〇頁）

蠱食者というのは、徳一のことである。最澄によれば、声聞・縁覚もいづれ大乘の悟りを開くはずであるが、徳一はこれを認めず、「彼云」として引かれた天台智顗⁽¹⁰⁾の説を批判しつつ、『法華經』を聞いて悟るのは、不定性の声聞であるから、『法華經』は円頓教ではなく、漸悟の菩薩のための教であるとする。

愍諭曰、法華應名通教、亦名漸教。何以故。退大聲聞、即名漸悟菩薩故、此亦不爾。漸悟有多种故。若爲退大聲聞說教名通教者、謂未開通教也。今已開以後、無隔別通教、雖有四教名、同見佛性故、雖有漸教名、而圓家之漸、非漸家之漸。今法華經者、正已開經故、不攝隔別通、非是引漸教、不攝漸家漸。又漸悟菩薩者、謂歷劫修行菩薩、名爲漸悟菩薩、爲此漸悟菩薩、說歷劫修行、名爲別教、非是回小入大等、新名爲漸菩薩等。今法華經者、退大乘者、調熟前通教、令進入寶所、非誘引之漸、非是通教漸。

（『伝全』卷二・二九〇～二九一頁）

これに対して、最澄の主張はこうである。四教の名があるとは言っても、同じく仏性を見る故に、また漸教の名前があると言っても、それは円の教えである天台宗の漸であって、漸教を説く人々の漸ではない。今この『法華經』はまさしく已に開かれた經典であって、円教に通じる前の通教（隔別の通教）に含めることはできない。これは漸に引く教えではないので、漸家の漸と同じではない。また漸悟の菩薩というのは、その意味は気の遠くなるほど長い間修行する菩薩のことをいい、それを名づけて「漸悟の菩薩」と言うのである。この漸悟の菩薩のために歴劫修行を説き、その教えを別教と名づけているのである。新しく小乗から大乘に入ったものを新たに漸悟の菩薩などと呼ぶのではない。今『法華經』は、大乘から退いてしまった小乗の修行者達が、前の通教を調熟して、宝所に進み入らせるのである。誘引の漸ではなく、通教の漸でもないのである。法華一乗は、三諦が円かに融けあっているという円融三諦の教

え、仏が自らそのままに真理を述べておられる随自意の教えを摂す、という。

要するに、徳一の言う「漸」は漸家の漸であって、円家の漸はそのような誘引の漸ではないとする。漸悟菩薩というのは、歴劫の修行をなす菩薩を言うのであって、『法華経』を聞いて大乘に回心した声聞を新たに漸悟菩薩と言うのではないとしている。ここで最澄は、漸悟菩薩を歴劫修行の菩薩とし、その修行を行う菩薩を別教の菩薩としてしている。また、回小入大の菩薩ではないとしている。「漸悟菩薩」と「頓悟菩薩」という術語自体は智顗『法華玄義』より引用されたものであるが、智顗および湛然には術語としてはほぼこの一箇所しかなく、最澄が漸悟菩薩・頓悟菩薩を多用するのは、徳一との議論によるものと見ることが出来るだろう。

そして、前掲の『顕戒論』は、この徳一との議論を引き継いでいると思われる。『守護国界章』におけるこの議論は、徳一の論難「此回心向大以後、復轉名漸悟菩薩、非別異類。」に対して、最澄が反論したものであるが、「回心向大」と『法華経』の位置づけが、最澄にとって大きな関心となっていたことは、大乘寺、小乗寺の別があるとし、大乘戒と小乗戒の別を明確に打ち出したために、南都側から直接的に批判の対象となった「四条式」の正式題にも窺われる。「天台法華宗年分度者回小向大式」の「回小向大」とは、『法華経』を意識した言い方であることには間違いない。天台法華宗が『法華経』の解釈において正統的立場であることを自負した式名となっているであろう。

『法華経』の教化の対象については、南都側からの論難にも、徳一からの論難と同じような内容の批判となって現れている。「開示終利小機謬明抛三十九」には、「僧統奏曰、然法華一乘、初爲聲聞、故三周説、終利小機。已上奏文」(『伝全』巻一・一三八頁)とあり、『法華経』は小機(小乗)を教化する經典であると批判される。この批判に対して、最澄は次のように答える。

論曰、小機時熟、爲説小乘。若大機熟、爲説大教。未聞爲小機三周説一乘、恐章疏謬也。法華三周、説圓一乘、終利大機。皆與佛記。所以四十餘年、不得顯説者、皆由大機未純熟故。經云、所以未曾説、説時未至故。豈不待大機哉、今僧統云初爲聲聞、故三周説、終利小機、深足可怪也。

（『伝全』巻一・一三八頁）

最澄の主張は、『法華三周、説圓一乘、終利大機』にある。ただ機が熟していなかったために説時が至らなかったのだとする。徳一が『法華經』に教化された声聞のことを例に挙げて、小機を利益したとし、それに対して、最澄が反論した前出の『守護国界章』当該箇所と内容的にはほぼ同じものを指していることが分かる。この問いは最澄にとって、僧綱の批判によって初めて聞くというのではなく、すでに経験済みであったのであり、徳一との論争成果が南都とのそれにおいて、形を変えて現れていることが分かる。

最澄が『顕戒論』において、大乘戒壇の独立を訴えたことについては、『法華經』と『梵網經』の正依・傍依の位置づけが問題とされることもある。⁽¹¹⁾しかし、最澄自身が、「自今以後。吾堂學生。永洗三毒心。仰法華制。不期羊象駕。可遊後三駕。」（天台法華院得業學生式、『伝全』巻一・二二～二三頁）等と度々述べるように、『法華經』の権実、あるいは天台教学の正否についての徳一との議論が『顕戒論』の前哨、あるいはほぼ平行してあったことを考えると、最澄は、『法華經』の権実に円戒を取ることに強い意識を持っていたと考えなければならない。⁽¹²⁾

以上、三権実論争における直道思想と『法華經』の関わり、さらにその『顕戒論』へのつながりを追ってみた。大乘戒壇独立の論争と三権実論争とは、直接の論争相手を異とする。しかし、法相宗を中心勢力とする南都仏教に対して、『法華經』の正統的解釈をもって自ら任じる天台宗の立場を表明することに変わりはないのであり、「法華の制」⁽¹³⁾であることは、大乘戒壇独立についての南都に対する反論であっても、立場を明確にしておく必要があったた

だと思われる。

四 円戒と時機

即身成仏、あるいはその関連となる直道の思想にも窺えるように、最澄の思想の特徴の一つとしてよくあげられるのは、機根の重視である。また、大乘寺とその戒律である大乘戒と小乗寺とその戒律である小乗戒をカテゴリーとして提出した最澄は、その機根についても触れているが、このことも徳一との論争と関わる部分が大きいと思われる。

最澄は若年時から深刻な末法意識（法滅感）を持っていたと言われ、そのことが入山の頃に著された『願文』の「悠悠三界、純苦無安也。擾擾四生、唯患不樂也。牟尼之日久隱、慈尊月未照。近於三災之危、没於五濁之深。」（『伝全』巻一・一頁）に見ることができ、このように早くから、正法への危機感を持っていた最澄であるが、それは『顕戒論』にも引き継がれ、幾度か現れている。たとえば次のようである。

『顕戒論』において、最澄は、度々、山修山学について触れ、その時節の根拠として、「開示知時住山明掘四十七」には、『法滅尽經』から「魔道興盛、魔作沙門、壞亂吾道、著俗衣裳。……中略……時有菩薩、辟支、羅漢、精進比丘、衆魔驅逐發遣、不預衆會。三乘入山、福德之地、淡泊自守、以爲欣快」と引いた上で、「今已知時。誰不登山也。」（『伝全』巻一・一五六頁）と結論している。⁽¹⁴⁾ 法滅の時代であるからこそ、山に入るといのである。このような考えは、比叡山入山の動機そのものとも予想されるので、最澄がもともと持っていたものではあるが、この点についても、徳一との議論を通して、修行と時代の対応関係についての考察を深めており、『顕戒論』につながるものとなっている。最澄は、像法末期という時代への観察と、修行の関係について、『守護国界章』において、明確に時代

と修行と機根の関係を徳一に対して示している。

麤食者所示多分小乘止觀者、相似步行迂回道。又多分菩薩止觀者、相似步行歷劫道。此二步行道、有教無修人。

當今人機、皆轉變、都無小乘機。正像稍過已、末法太有近。法華一乘機、今正是其時。何以得知、安樂行品末世法滅時也。
（『伝全』卷二・三四九頁）

現在（当時）のような末法の時代に甚だ近い時代においては、その時代に合った修業があるとする。今は、『法華經』の「安樂行品」に示す法滅の時であるとするのである。

『法華經』の安樂行は、最澄にとって重要な意味を持つものであり、そのことは光定の『伝述一心戒文』にも明確に主張されているが、⁽¹⁵⁾『顯戒論』においても、僧綱が最澄の「安樂行品」の解釈を批判したと思われる箇所がある。

「開示其安樂行是上地行謬明拋四十」に、僧綱が「僧統奏曰、其安樂行、是上地行、非謂地前凡夫菩薩。故經云菩薩摩訶薩也。」（『伝全』卷一・一三八頁）と言い、これに対して最澄は、「論曰、持品上位、不用四行。安樂下位、必修四行。摩訶薩之言、定通上下。」（『伝全』卷一・一三九頁）と答え、安樂行は下品の菩薩に通じるものとして答えている。この箇所の僧綱の批判は、最澄の言う「法華の制」を批判したものであり、具体的には最澄が僧綱への反論として揚げた「安樂行品」の「又不親近求聲聞、比丘比丘尼、優婆塞、優婆夷。亦不問訊。若於房中、若經行處、若在講堂中、不共住止。」（『伝全』卷一・一三九頁）を指すとされる。「四条式」の中で、最澄が直接、「安樂行品」の当該箇所について触れているわけではないが、その主張の根拠を理解していたものと思われる。「安樂行品」は、末法時の菩薩の修行と深く関わるものであり、徳一との議論においては、前掲の『守護国界章』の史料のように、末法あるいは像法末期の時代の修行のあり方として重要な根拠とされる。⁽¹⁶⁾「安樂行品」のみではなく、末法法滅の根拠と受持經

典としての『法華經』というとならえ方は、『法華秀句』には傾向をさらに強めて明確に現れているから、安樂行を中心とした『法華經』を大乘戒の重要な根拠として置くということは、大乘戒が正像末の時代と大きく関係すると考えられていることが分かるのである。

最澄に円の三字思想があるとして引かれる『顯戒論』の末尾の偈には、「圓教法泉開心地 圓機衆生得見水 一乗出家年年雙 圓教三學末具足 二學雖芽未戒學 是以觸鱗請圓戒。」（『伝全』巻一・一九七頁）とあり、円教の三字のうち戒だけが備わっていないとする。円教の興隆について、すでに最澄は円機已熟の思想を打ち出している。不十分なながらも、円教については、二人の年分度者もいることであり、一応整っている。戒も法華の制に基づくものであり、別物ではない。だからぜひとも円戒が必要であると言っている。これは単なる文飾ではなく、大乘戒の背景にある理念は『法華經』によって統一され、大乘戒壇独立も、『法華經』の理念によって、機根と時代に合ったものを成すべきという最澄の主張であると思われる。そしてその理念中国に先蹤があり、最澄が若年から持っていたという面もあるけれども、徳一との議論において、より明確化、先鋭化したという様子が窺われるのである。

五 おわりに

最澄の思想は、大乘戒壇独立の主張と三一権実論争で代表されるが、それらはほぼ時期を同じくして行われた議論であり、それぞれの論争には個別の背景や内容もあるが、中心的な思想については、お互いに関連する。そのことを即身成仏思想と機根の強調、およびその理論的背景となる『法華經』の時代観に探ってみた。その結果、最澄の若年時から持っていた思想や天台教学の持つ思想が、徳一との議論によって取捨選択、あるいは深化を遂げ、『顯戒論』

の円戒に現れていることが分かった。戒の問題は、本論で取り上げた他にも、『授菩薩戒儀』、『内証仏法血脈譜』などいくつか触れなければいけない論書があるが、それらについては回を改めて考察したい。

註

- (1) 石田瑞磨『日本仏教における戒律の研究』在家仏教協会 一九六三、第三章「最澄の戒律」（一三〇頁）参照。
- (2) なお、円戒と言った場合の「円」であるが、平了照「円戒の円について」（『戒律の世界』溪水社 一九九三）、および高佐宣長「圓戒の圓をめぐる」（『印度学仏教学研究』三六―二 一九八八）等を参照。「円」が何を定義するかについては、梵網戒と法華の位置づけの問題もあって厳密に定義することは難しいが、円戒、円教、円機、円三学といった円にまつわる用例から、この論文では、天台円教の円というような広い意味で取っている。
- (3) 中国天台宗からの系譜については、前掲石田書、第三章第二節および、小寺文穎「伝教大師に及ぼした明曠疏の影響——小乗戒棄捨の問題をめぐる——」（『印度学仏教学研究』一五 一九六五）を参照。小寺論文は、明曠の「円の三聚」を最澄が伝承したことに注目し、さらに智顗、湛然、明曠の三者の戒律思想を比較する。とくに明曠と最澄の戒律観の近さに注目し、「円教菩薩は行布不次第による十重四十八輕を頓具するというのが明曠の主張であった」とし、また明曠の影響を強く受けた最澄も、「つまり、小乗戒を次第しないで円心を発して直に梵網を頓具する頓行菩薩の立場に立った」とされる。
- (4) 前掲石田書には、道璿、聖徳太子、行基に注目されている（二五五―二八八頁）。道璿については、その撰とされる『南唐の註経（註梵網經）』が最澄によって引かれており、また法進の梵網經の註についても、『伝述一心戒文』（『伝全』巻一・五六五頁）の示すところによれば、最澄の参考とするところであり、最澄の梵網戒についての解釈を考える上での史料となっている。ただ、最澄は自説の根拠とするのに忙しいため、影響関係を単純に表したものではない。論敵との論争のために、多くの仏典・論書を引くという過程を通して、最澄独自の思想を形成していったと思われる。
- (5) 円戒には様々な側面があるが、成仏思想としての円戒は、浅井圓道「伝教大師と法華思想の連関」（坂本幸男編『法華経の思想と文化』平楽寺書店 一九六五）および高佐宣長「最澄の成仏観をめぐる」（『仏教学』第三十号 一九

九一)を参照。

- (6) 円機については、『顯戒論』末尾の偈(『伝全』巻一・一九七頁)にも触れる。この偈については、本文第四節「円戒と時機」に論及している。

- (7) 術語として、「即身成仏」というものが最澄の著作に現れるのは、『法華秀句』が初めであるが、類似概念として、直道、大直道、頓悟菩薩などがある。これら術語から見た思想関係については、拙稿「最澄の頓と漸——術語から見た即身成仏——」(『仏教学』五〇・二〇〇八)に考察した。

- (8) 石田前掲書(二〇二頁―二〇五頁)では、この南都側の主張は、南都戒にとって法華開会の考えが大きな支柱であったと指摘する。また最澄自身の論からも、法華已開後においては回小入大菩薩の行は必ずしも否定されるものではないのに、ここで『不定入定入印経』を引き、南都側の戒を回小入大菩薩の行とするのは、最澄側の一方的な論によるものと述べている。

- (9) 明曠『天台菩薩戒疏』(大正大藏経 巻四〇・五八四頁上段)。註(3)小寺論文を参照。

- (10) 『法華玄義』(大正大藏経 巻三三・八一四頁上段)。

- (11) 註(12)参照。

- (12) 『法華経』あるいは『梵網経』の正依・傍依の問題については、平了照「円戒の円について」(『戒律の世界』溪水社一九九三)に従来の説がまとめられている。石田前掲書では、戒律においては梵網を主とし法華は副次的立場と解釈されているが(二〇八頁)、『法華経』が円戒において、大きな位置づけを持っていることに変わりはない。法華権実論争としての側面を持つ徳一との論争成果が現れていると考えられる。

- (13) 「天台法華院得業学生式」(『伝全』巻一・二二頁)、『顯戒論』(『伝全』巻一・七三頁、七八頁)。

- (14) 他に山修山学を主張した章としては、「開示蘭若修学第一義諦六波羅蜜明據四十八」(『伝全』巻一・一五六頁)等。

- (15) 「先師云、今我山家宗、寄安樂行品文、不依小乘戒、而依大乘戒、約法華意。」(『伝全』巻一・五六六頁)

- (16) 白土わか「安樂行について」(佐々木教悟編『戒律思想の研究』平楽寺書店 一九八一)参照。

- (17) 『法華秀句』(『伝全』巻三・六五―六六頁、二七〇頁、二七四頁、二七六頁)等。

- (18) 『授菩薩戒儀』においても、戒と成仏の遅速を結びつけている(『伝全』巻一・三〇四―三〇五頁)。著作年次は不明

円戒と三一権実論争（進藤浩司）

なので、その時期によっては考察を修正・変更する必要があると思われる。